第7回人権賞 受賞者 高橋 實／高橋 次子

【受賞理由】

視覚障害者の勉学上の条件整備（テキストの点訳等）、就職の援助、社会への啓蒙等を目的とする日本盲人福祉研究会を設立し、その活動の中心的役割を果たすことにより、100校あまりの大学の門戸開放と、国家公務員試験の点字受験を実現させた活動に対して。

Q1 どのようなきっかけから「受賞テーマ」に取り組むようになりましたか。

少年の私は、兄弟や地域の友だちが進路を選択できるのに自分にはそれが許されないことに苦しんだ。盲学校の職務教育は鍼・灸・按摩師に限られており、藁をも掴む思いで盲啞学校義務教育令で1949年に札幌にできた新設校に入学し将来の進路を模索したが、ここでも期待は裏切られ1年間で岩手盲学校に転校した。一方、それまで就学年限さえ満たしていれば無条件でも貰えた鍼・灸・按摩師免許が1947年から知事試験になるというのに、私は「二兎を追うもの一兎をも得ず」という思いからそれも断っていた。

Q2 その活動には、どのようなご苦労がありましたか。

岩手盲学校の校長は、生徒との希望をよく聞きその個性をのばすことで有名だった。ここで私は『点字毎日』と盲人編集長の存在を知り、「ジャーナリスト」になる夢を抱き大学進学を志した。しかしながら法学部に出した願書は、「不受理」となり、文学部で受理された。1949年から視覚障害者が正規の大学生として認められていたにもかかわらず、私が受験した1954年の状況はかくの如きものであった。入学後の学習環境などは皆無、それを要望することはタブーに等しく、ノートだけが頼りだった。就業も定員枠に遮られ、結局2年間就職浪人を余儀なくされた。

Q3 人権賞を受賞してどのような変化がありましたか。

私自身が味わった進路・進学・学習条件・卒業後の就職難といった二重三重の苦渋を少しでも解消していきたいという願いを実現するため、1954年以来今日まで学習即実践の活動に取り組んできた。そんな折、名誉ある人権賞を受賞したことは活動に拍車をかけることになり、副賞はその原動力となった。

Q4 「受賞テーマ」はどのように発展・継承され、現在はどのような活動状況となっていますか。

バリアフリーとかIT革命などといった一種熱病のような言葉に期待を持たされている。しかし、現実には、大学のテキストなど専門性をもった点訳者は少なく、特に資格試験などの問題集やテキストになると、図表・グラフなどあって出版所のプロでさえ音を上げる視覚的な問題が多い。それらを民間

施設のボランティアに委ねているという国の批判はされるべきである。弁護士会などの有識者からの総論的な提案は結構あるが、各論で私たちの運動をカバーして貰えるようにならないと、本当の福祉は発展しないと思う。

Q 5 あなたにとって、いま最も関心のある「テーマ」は何ですか。

障害者の欠格条項が見直され、各種資格が規制緩和の波にのっているが、試験の実施、その後の取り組みなどについて具体的な方策が打ち出されない限り、絵に描いた餅に等しい。私たちが点字による国家公務員試験を実施するよう運動して20年。1991年から門戸は開放されたものの、点字による問題集や参考書などは未だに当センターのボランティアに委ねられており、国は一銭も負担しようとしていない。センターは、今年限りで赤字に堪えかねて点字出版を取りやめることにしており、まず何よりも点字やテープによる参考資料の提供が急務だと思う。

Q 6 新たにはぐくむべき「人権」のテーマなど、今後の抱負や活動目標とともにお聞かせください。

I T技術革命は、肌理こまやかな施策が伴わないと強者と弱者の間に格差が広がると言われている。地方分権時代では、いろいろなI T予算が国で組まれても、それが実施主体の自治体になると、財政状況が国の施策についてゆけないという事実がいくつもある。実施自治体の財源状況によってI Tの恩恵に浴せるかどうかが決まるようでは、私たちはまず住むところを選ばなくてはならないことになる。地方分権の良さは、地域住民一人ひとりの痒い所にまで施策が及ぶというところに意味がある。当事者の力関係と実施自治体の財源関係で物事が進められるということは、暮らしと福祉に予想以上のギャップをつくることになる。I T革命の便利さ追求の下で、点字という視覚障害者の生活文字が公然と軽視されるのではないかという不安がある。私たちは今年度から点字技能検定試験制度を設け、その第1回を1月28日に東京と大阪で557人の参加のもとで行った。今後継続的に実施し、点字の専門性とレベルの向上、啓発普及に力を入れ、晴盲共に使用できる文字として定着させていきたいと思っている。